

平成 30 年度学校評価結果報告書

1 自己評価シート(年度末評価) 様式 5	1
2 自己評価シート(年度末評価まとめ) 様式 6	5
3 学校関係者評価シート(年度末評価) 様式 8	7

平成31年3月

賀茂高等学校 全日制課程

平成30年度自己評価シート(年度末評価)

校番	24	学校名	賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	<input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 分
----	----	-----	--------	------	-------	---	---------------------------------------

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。							
「活用と協働」を取り入れた学びが機能している。	「活用・アウトプットを取り入れた授業」により、課題や疑問を見つけ、積極的に質問するなどして前向きに授業に取り組んでいる。 (%, 生徒アンケート)	91	90	91.0	A	組織的な授業改善の推進により、授業における「活用場面」に生徒も慣れ、積極的な学習活動が行えるようになったため。	教務
	授業での協働の場面（ペアワーク等）によって、学習内容の理解が深まっている。 (%, 生徒アンケート)	90	90	92.2	A	授業でのコミュニケーションが豊かになり、ペアやグループで学び合うことによる理解の深化を生徒が実感したため。	
グローバル社会を見据えたキャリア教育を展開している。	GAP(グローバル・アクション・プログラム)により、多様な視点から社会を分析することで、課題の解決に向けた提案ができる。 (%, 生徒アンケート)	95	90	89	A	地域への提言をまとめることにとどまらず、ポスターやICTを用いたプレゼンテーションスキルの向上もみられ、生徒の高い自己評価に繋がったため。	2 学年会
	国際交流の機会を、異文化に目を向ける契機とし、グローバルな視点から自分の考えを発信できる。 (%, 生徒アンケート)	75	90	91.0	A	姉妹校韓国ミチュホル外国語高校との交流事業、広島大学留学生IDECとの交流学习、東広島ガイドブック英語版の作成といった能動的・協働的な活動により、地域や世界との繋がりについて考え、自分なりの意見をまとめ、発信することができたため。	1 学年会

【評価結果の分析】

- ・授業研究、互見授業など組織的な取組により、授業アンケートにおける「活用・アウトプット」、「協働」の肯定的評価は7月→12月でそれぞれ89.5→92.4%、91.4→93.4%とともに増加し、成果が表れている。
- ・総合的な学習の時間(GAP)において、1年生はマインドマップ研修、社会人・職業人講話、新書購読といった探究の基礎活動を、2年生はフィールドワークを通してまとめた考えをポスターや小論文にまとめ、発信する活動を行い、長期的な視野で生徒の力を伸ばす取組としている。

【今後の改善方策】

- ・主体的な学びに向けた授業スタイルの変化を生徒が受け入れている一方、内容面で教員の満足度が十分でない。教科別研修や全体研修を充実させるなど、教員の授業力向上に向け、具体的な年間計画を検討する。
- ・探究活動をより深めるため、GAPについては取組の期間をこれまでの2年間から3年間に伸ばし、ESDの視点からSDGsをテーマに活動内容を見直すとともに、プレゼンテーション技術など発信力の向上も強化していく。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
2 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる。							
広島大学への合格者数を増やす。	広島大学合格者数 (名)	6	20	10	B	合格者は、AO入試で2名、前期試験で7名、後期試験で1名で合わせて10名である。昨年度より増加した。	進路 指導
学力向上と部活動との 両立ができています。	模試平均偏差値が1学年で52、2学年で50を超えている。 (国数英平均)	1学年 52.2 2学年 50.5	1学年 52 2学年 50	1学年 48.3 2学年 51.2	B	1学年は11月回の結果が7月と変わらず後半伸び悩んだ。2学年は11月回で49.9と落ち込んだが1月回で回復した。	進路 指導
	センター試験において、受験者の40%が全国平均点を超えている科目数	3	7	10	A	19科目中、国語、現代社会、倫理、政治経済、数学I・A、物理基礎、化学基礎、生物基礎、生物、地学基礎の10科目で達成したため。	進路 指導
	1年生は平均150分以上、2年生は平均160分以上、3年生は平均210分以上の家庭学習ができています。 (平均値(分)、生徒アンケート)	1学年 148 2学年 160 3学年 222	1学年 150 2学年 160 3学年 210	1学年 170 2学年 151 3学年 231	A	2学年で目標に届かなかったものの、1・3学年では平均で20分以上目標平均値を上回ったため。	進路 指導
	部活動で学んだことが、自分の学習活動に良い影響を与えている。 (%, 生徒アンケート)	85	85	86.7	A	1年生 84.7%、2年生 85.1%、3年生 93.8%であり、生徒総平均で目標値を上回ったため。	特別 活動
	GTEC for Students のトータルスコア平均	—	1学年 415/660 2学年 450/810	1学年 425/660 2学年 458/810	A	1・2学年ともに、12月回の全国平均を上回るとともに、目標値を達成した。	外国 語科

【評価結果の分析】

- ・大学入試センター試験では、得点率70%以上の生徒が23名いるが、全国平均点が高かったため、業者の合否判定では厳しい予想が出ている。広島大学については、マーク・記述のドッキング判定でAが2名、Bが3名、Cが4名である。
- ・基礎・基本の定着を図るための家庭学習プリントや小テストの実施は継続して行っている。模試の結果について、1学年は過去2年間との比較で約2ポイント低く、2学年11月回の数学・英語で平均偏差値が50を下回った。記述解答がより強まった新傾向の問題に対応できていないと思われる。
- ・家庭学習時間について、1学年は真面目に家で課題に取り組む習慣ができていますが、単に与えられたことをこなすにとどまっているくらいがある。2学年は定期考査の時期のみ増加するとか、クラスによる差が大きいなどの課題があり、全体平均では伸び悩んでいる。3学年は記録シートに書かれた内容を生徒と担任で共有し、面談等を通じて指導に生かすことができた。
- ・アンケートで部活動が自身の学習活動にプラスに働いていると回答した生徒は特に3年生に多く、継続してやり通したという自信と満足感が学習への意欲と自己肯定感につながっていると考えられる。

- ・「高校生の学びの基礎診断」に認定された GTEC for Students について、1 学年は前回受検の 7 月回平均 395 から 30 ポイント、2 学年は前年受検の 12 月回平均 407 から 51 ポイント上昇した。3 技能のうちでは Writing のスコアが高く、授業での成果が表れている。

【今後の改善方策】

- ・広島大学へは、一般入試のみならず、AO や推薦入試など多様な入試制度を適切に活用し、より多くの生徒に受験機会を与えるよう取り組むと同時に、小論文・面接指導を組織的に行う体制を確立する。また、二次試験に向けた対応について、教員の指導力向上を図っていく。
- ・模試の活用については、業者のデジタルサービスを活用して、目標設定から振り返りまでを生徒自身に行わせ、PDCA サイクルの確立を図る。家庭学習の定着についても ICT プラットフォームを導入し、生徒自ら自主的に学習時間の管理や振り返りができる環境を整える。
- ・部活動を通して、単に競技力向上のみならず、時間管理や集中力・忍耐力、思いやりの心などを養う指導を心掛ける。また部活動どうし横のつながりを意識し、互いに向上し合う雰囲気づくりに向け、顧問間の連携を密にする。
- ・GTEC for Students のスコア向上に向け、課題である Reading 技能の強化に当たり、語彙力の定着を重視した取組を行う。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
3 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。							
1 人 1 リーダー制が機能し、他者を認め、貢献することができる。	1 人 1 役制で自分が人のために役に立とうと考えながら様々な活動や行事に参加できた。(%, 生徒アンケート)	87	85	82.7	B	委員会活動や行事への取組は前向きで、アンケートでは 1 学年 84.1%, 3 学年 83.2% と 8 割を超えたが、生徒会活動の中心となる 2 学年が 78.6% と下回ったため。	特別活動
	挨拶をする習慣が身に付いている。(%, 生徒アンケート)	94	95	95.0	B	挨拶の言葉を交わすという点では定着が進んだが、そこに込める思いや相手への態度など、高次の目標の実現を目指しているため。	生徒指導
	美化委員による清掃点検(年 5 回以上)の評価において、よく清掃ができている。(平均%)	91	95	90.3	B	目標値には届かなかったが、よりシビアな点検項目に改定したことにより、昨年度よりは向上が図られたと判断できるため。	環境保健

【評価結果の分析】

- ・生徒会理事を中心に、クラス役員や部活動の部長との連携を密にしたため、生徒間のやり取りを通じ、自発的な意識向上が図られている。2 学年でアンケート評価が低かったのは、自己肯定感が低いことが起因しているのではないかと考える。
- ・朝夕の登下校時、教室や校内での挨拶を交わすことはほぼできている。そこに相手への敬意や相手を尊重する態度、互いが元気になれるような要素など、挨拶の持つ本来の意義を達成するところまで生徒の意識を高めたい。
- ・計画的な行事前の大掃除や清掃点検日の清掃は丁寧に行われるが、平素の清掃は統一した清掃時間の確保を含め、徹底に向けて改善が必要である。

【今後の改善方策】

- ・自主的な生徒会活動の構築に向け、各種委員会や部活動部長会を定期的で開催し、積極的に意見を出し合える場とする。
- ・挨拶について、単に言葉を発するという指導にとどまらず、相手を尊重し、互いに元気になるためのツールとして、挨拶を通じた

活気ある学校づくりを意識させるため、教員が範となるような挨拶を心掛ける。

- 各清掃分担場所における清掃指導を担当教員が責任をもって行うことに加え、入学時、1学年生徒を対象に、清掃専門業者等を講師に清掃の心得や具体的な清掃方法について講習の場を設ける。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
4 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。							
保護者や地域社会に対して、積極的に情報を発信する。	ホームページのアクセス数 (回/1ヶ月当たり)	3,033	3,000	4,540	A	2/12時点で目標値の1.5倍のアクセス数を獲得している。入学者選抜に伴い3月にアクセスが増えることを見込むと、さらに大幅な更新となるため。	総務
	ホームページの更新回数 (回)	131	130	178	A	「校長 eyes」の立ち上げにより週2回以上の更新が継続的に行われ、目標値を大きく上回ったため。	
中学生へ効果的なアピールを行う。	オープンスクールへの参加者数(人)	492	600	550	B	昨年度からは62名の増加となったが、目標値に大きく届かなかったため。	総務
	賀茂高だよりの定期発刊 (増刊号を含む)(回)	7	7	7	A	年度当初の計画どおり、中学生向け4回、地域向け増刊号2回の発行を終え、年度末の最終号の準備を進めているため。	

【評価結果の分析】

- 学校HPについて、上半期は豪雨災害時に情報提供を行ったためアクセスが増えた面があるが、下半期も安定して月3000件以上のアクセス数を確保していることから、学校と家庭との連携を図るツールとしての機能がこれまでより向上している。
- オープンスクールについて、中学校行事や近隣校についての情報把握に努め、実施時期を例年と変更したり、早期の周知を図ったりしたため、昨年度より参加者が増加した。災害の影響がなければ目標値を達成したものと思われる。

【今後の改善方策】

- 学校HPについて、特に部活動成績の情報を担当者が迅速に集められる体制をつくる。よりタイムリーな更新を実現するため、校務上、専任者を置くことが望まれる。
- オープンスクールについて、公開授業の充実を含め、参加生徒・保護者アンケートの結果や職員からの意見等を積極的に取り入れ、改善を図る。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
5 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。							
教育相談体制の充実を図る。	本校は教育相談の体制が充実していると思う。 (%, 学校評価アンケート)	—	75	62	B	相談日については教室掲示やほけんだよりを通して周知を図ったが、学校体制としての教育相談の充実については浸透が十分とは言えなかったため。	環境 保健 生徒 指導
職員の働き方改革を推進する。	業務改善の取組を学校全体で取り組んでいる。 (%, 職員アンケート)	—	65	63	B	職員が互いにサポートしあう雰囲気が高いという好環境を生かすとともに、個々の業務の意味や必要性について議論する機会が生まれ、多忙感の低下に繋がっているため。	各部 主任 管理 職

【評価結果の分析】

- ・教育相談後に事後連絡会を実施し、スクールカウンセラーからの助言を基に当該生徒について共通理解を図っている。相談希望も増えており、すべてを受けられない回もある。
- ・業務改善の必要性については理解が図られており、分掌では業務のスクラップも進んでいるが、各教科を始めとする生徒に関わる部分での取組削減は、教育活動の停滞を招くのではとの恐れから進みにくい状況にある。

【今後の改善方策】

- ・相談した生徒の 88%は、心の整理ができ、利用してよかったと答えている。希望生徒のみならず、いじめアンケート等を用いてこちらからカウンセリングを受けるよう生徒に働きかける取組をより進めたい。
- ・個人、教科、分掌など各レベルで日々の業務を見直し、コストと効果について現状の洗い出しを図るとともに、それを根拠とした業務や行事の改善及び改廃案を策定し、次年度に引継ぎ実行する。

平成30年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	24	学校名	賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	<input checked="" type="checkbox"/> 全・定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------	------	-------	---	---

1 評価結果の分析

(1) 成果

- 目標 1 「学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる」
 - ・ 授業研究、互見授業など組織的な取組により、授業アンケートにおける「活用・アウトプット」、「協働」の肯定的評価は7月→12月でそれぞれ 89.5→92.4%、91.4→93.4%とともに増加した。
 - ・ 総合的な学習の時間（GAP）において、1年生はマインドマップ研修、社会人・職業人講話、新書購読といった探究の基礎活動を、2年生はフィールドワークを通してまとめた考えをポスターや小論文にまとめ、発信する活動ができた。
- 目標 2 「挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる」
 - ・ センター試験において、19科目中、国語、現代社会、倫理、政治経済、数Ⅰ・A、物理基礎、化学基礎、生物基礎、生物、地学基礎の10科目で本校受験者の40%が全国平均点を上回った。
 - ・ 家庭学習時間について、特に3学年で定着と充実が図られ、記録シートに書かれた内容を生徒と担任で共有し、面談等を通じて指導に生かすことができた。
 - ・ アンケートで部活動が自身の学習活動にプラスに働いていると回答した生徒は特に3年生に多く、継続してやり通したという自信と満足感が学習への意欲と自己肯定感につながっていると考えられる。
 - ・ 「高校生の学びの基礎診断」に認定されたGTEC for Studentsについて、1学年は前回受検の7月回平均395から30ポイント、2学年は前年受検の12月回平均407から51ポイント上昇した。
- 目標 3 「貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる」
 - ・ 生徒会理事を中心に、クラス役員や部活の部長との連携を密にしたことにより、生徒間のやり取りを通じ、自発的な意識向上が図られた。
 - ・ 朝夕の登下校時、教室や校内での挨拶を交わすことはほぼできている。
 - ・ 計画的な行事前の大掃除や清掃点検日の清掃は丁寧に行われた。
- 目標 4 「広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする」
 - ・ 学校HPについて、更新回数・アクセス数ともに昨年度を大きく上回った。
 - ・ オープンスクールについて、早期の周知を図ったため、昨年度より参加者が増加した。
- 目標 5 「教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する」
 - ・ 教育相談について、相談希望は増えている。相談後は事後連絡会を実施し、スクールカウンセラーからの助言を基に当該生徒について共通理解を図っている。
 - ・ 分掌ごとに、業務のスクラップや進捗管理による業務改善が進んでいる。

(2) 課題

- 目標 1 「学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる」
 - ・ 主体的な学びに向けた授業スタイルの変化を生徒が受け入れている一方、内容面で教員自身の満足度が十分でない。
 - ・ GAPについて、総合的な学習の時間が“探究”の時間と変わることに向け、内容の再構築を図る必要がある。
- 目標 2 「挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる」
 - ・ 模試の結果について、1学年は過去2年間との比較で約2ポイント低く、2学年も数学・英語で平均偏差値が50を下回った。記述解答がより強まった新傾向の問題に対応できていないと思われる。
 - ・ 家庭学習時間について、1学年は単に与えられた課題をこなすにとどまっている様子があり、2学年は定期考査の時期のみ増加するとか、クラスによる差が大きいとかいった安定しない状況がある。
- 目標 3 「貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる」

- ・挨拶の言葉を交わすという点では定着が進んだが、そこに込める思いや相手への態度など、高次の目標の達成が十分でない。
- ・平素の清掃活動について、場所によって行き届いていない状況がある。

- 目標4「広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする」
 - ・学校HPへの部活動実績の掲載について、顧問により対応にばらつきがあり、必ずしもタイムリーなものとなっていない。
 - ・オープンスクールについて、参加者の満足度をより向上させるため、内容の見直しが必要である。
- 目標5「教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する」
 - ・教育相談体制の充実が広く認知されていない。
 - ・教員の時間外勤務の削減が進んでいない。

2 今後の改善方策

- 目標1「学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる」
 - ・主体的な学びの構築に向け教科別研修や全体研修を充実させるなど、教員の授業力向上に向け、具体的な年間計画を検討する。
 - ・探究活動をより深めるため、GAPについては取組の期間をこれまでの2年間から3年間に伸ばし、ESDの視点からSDGsをテーマに活動内容を見直すとともに、プレゼン技術など発信力の向上も強化していく。
- 目標2「挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる」
 - ・模擬試験の平均偏差値の向上に向け、記述解答がより強まった新傾向の問題に対応すべく、教員の指導力向上を図っていく。さらに、模試実施業者のデジタルサービスを活用して、目標設定から振り返りまでを生徒自身に行わせ、PDCAサイクルの確立を図る。
 - ・家庭学習の定着についてはICTプラットフォームを導入し、生徒自ら自主的に学習時間の管理や振り返りができる環境を整える。
- 目標3「貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる」
 - ・挨拶を通して活気ある学校づくりを意識させるため、教員が範となるような挨拶を心掛ける。
 - ・清掃点検の方法を工夫して場所ごとに具体的な課題を明らかにするとともに、清掃のポイントや作業の仕方についての生徒研修を実施する。また、清掃開始時刻が全クラスで揃うような仕組みについて校内で検討する。
- 目標4「広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする」
 - ・学校HPについて、特に部活動成績の情報を担当者が迅速に集められる体制をつくる。
 - ・オープンスクールについて、公開授業の充実を軸に、内容の改善を図る。
- 目標5「教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する」
 - ・教育相談について、希望生徒のみならず、いじめアンケート等を用いてこちらからカウンセリングを受けるよう生徒に働きかける取組をより進める。
 - ・個人、教科、分掌など各レベルで日々の業務を見直し、コストと効果について現状の洗い出しを図るとともに、それを根拠とした業務・行事の改善・改廃案を策定する。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

- ・評価指標に基づき現状分析をより詳細に行い、課題を明確にする。
- ・各項目に対する今後の改善方策について、より具体的な取組を明らかにする。

平成30年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成31年3月4日

校番	24	学校名	賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	<input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 分
----	----	-----	--------	------	-------	---	---------------------------------------

1 評価結果の分析

評価項目	評価	理 由 ・ 意 見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	学校の果たすべき使命、ビジョンが学校経営計画に明確に示されており、適切である。
目標の達成状況の評価の適切さ	A	目標に対する達成度がしっかり把握されており、妥当である。
目標達成に向けた取組みの適切さ	A	精力的な授業改善の取組に加え、放課後補習、土曜講座を実施するなど努力がみられる。
評価結果の分析の適切さ	B	学習時間記録シート等を活用し、継続的な資料の収集に努めており、適切である。一方で、各項目について、今後の向上に向け、現状分析をより詳細に行って欲しい。
今後の改善方策の適切さ	B	今後の改善方策について、「検討する」「引き続き行う」等、具体的な内容が分かりにくい項目がある。特に教職員の指導力の向上については、具体的な方策を示してほしい。
総合評価	A	数値目標を掲げ、取組の状況が客観的に評価されている。学校全体として、十分に説得力のある取組が進んでいることが感じられる。

A とても適切である B 概ね適切である C あまり適切でない D まったく適切でない